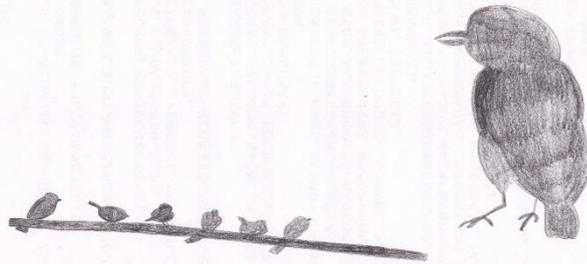


# 夜鳥の声

～酒井明 説話集25※～



世の中には、いろいろと吉い（よい）しるし、悪いしるし、として伝えられてきたことがあります。

夜鳥の鳴き声なんかも、そうしたもののひとつでしょう。

おばあさんと孫娘は、暗いランプの光をたよりにせっせと「ダス」を編んでいました。「今日は炭出しだから、夜なべ仕事になるので山へ泊る」と言い残して、おじいさんは出かけて行ったのです。

その炭を入れる入れ物を、カヤで編むのです。大ガヤの乾かしたのと、ワラ縄が材料ですから手が荒れます。

しかし、孫娘はおばあさんと一緒に仕事をするのが大好きでした。

おばあさんはいろんな話をしてくれます。

「ここら辺にはのう、いろんな話が残っちゃうが、本当のこともあろうし、話だけのこともあろう。じゃがのう、昔話や言い伝えじゃいうて、あんまり話半分に聞いたらいかんもんもあるぞ」

そう言いながら

「それぞれこないだの晩じゃ、夜中近くにキジが鳴いつろ。そのあと地震があつろが。昔からキジは地震を知らせる鳥じゃいわれちよる」

「それにしてもなあ、あんまり気持ちのようないもんもおるのう。夜道を一人で歩きよると、後から夜雀がつけて来る。雀かどうか分からんが、ちゅんちゅん鳴いてつけて来る。これにつけられたら、しっかり腹に力を入れて惑わんようにせんといかん、と言われたもんよ」

と、おばあさんは話します。

「夜雀もじゃが、なんというたて夜鳥ばあ嫌なもんはなかろう。昼でも鳥がさわぐと気持ちのええもんじゃあないが、夜中に鳴く鳥ときたら格別なんとも気味悪いもんじゃ。幸い近頃聞かんけんど、この夜鳥が鳴くとこのう、必ず近所にのうなる（亡くなる）人があるいうて、昔から嫌うたもんよ。そんな鳥じゃから、早ようからそんなことが分かるがじゃろかのう」

そこまで話して

「さあてと、何枚編んだかのう。お前がようやってくれたけん、これだけあったら間にあう。今夜はもう寝るとしようか」

炭が売れたら、この子に何をかうちゃろか。

おばあさんが思案する。

「おじいさんはもう済んだらうか」

孫はそう言いながら、ランプをさげて居間にもどりました。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。